

「あの日、そして今」(50分)

対象/中学生・高校生

1. プログラムの趣旨

中学生の時期には、自立心の強まりとともに、日々の生活の中で自己を支えてくれている多くの人の善意や支えに気づく一方で、感謝の気持ちを素直に伝えることの難しさも感じている。本作文の「私」は、震災後、以前交流ができた友人や、全国の人々からの温かい支援と親切な行為に触れ、自分よりも困っている友人に協力したり、支援してくれた多くの人へ感謝の思いを抱いたり、心が変わっていき、そんな「私」の姿から、自分の存在を深くみつめ、考えさせたい。

2. ねらい

このプログラムは中学校学習指導要領の道徳・内容2-(6)「多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる」を受けている。指導に当たっては、まず、多くの人々の善意や支えにより、日々の生活が成り立ち、現在の自分があることを踏まえ、それに対する感動や喜びが自ずと感謝の心となって表出されるものであることについての理解を深めることが必要である。感謝の心は、他の人とのかわりに始まり、多くの社会の人々への感謝、さらには自然の恵みへの感謝と、次第に広がっていく心情を育てたい。

3. 展開

段階	学習内容	教師の支援・指導上の留意点
導入 (5分)	①今までの、親切や感謝を感じる場面を思い浮かべる。 ・あなたはどんな時に、自分は誰かに支えられていると感じるか。	・終末で深めていくので、ここでは軽く振り返る程度にとどめる。
展開 (35分)	②作文「あの日、そして今」を読み話し合う。 ・私は、地震後に父親が迎えに来た時に、どんなことを考えていただろう。 ・私は、大変だったのは生活以外より人間関係だといっているが、どんなことが大変だっただろう。 [中心発問] ・震災を体験した私を支えたものは、何であっただろう。	・肉親に会えたうれしさと同時に、まだ家族が来ていない友だちはどうなるだろうという、2つの視点を押さえる。 ・自分も被災した立場でありながら、もっと辛い被害にあっている友人を支えたいと思っているが、どう接したり励ましたりして良いのか、悩む私の気持ちを考えさせる。 ・自分だけが助かってしまった、自分の被害が小さかったということに罪悪感をもってしまう気持ちを考えさせる。 ・単に物資の支援ということだけではなく、人の支えや励まし、あたたかい言葉かけなどの人がしてくれた行為に対しても、考えるようにする。
まとめ (35分)	③自分をふりかえる。 ・今までどんな時に人に助けてもらったり、支えてもらったりしただろう。 ・教師の話聞く。	・級友の意見を聞き、自分に重ねて考えさせる。 ・ふと忘れがちな、身近にいる人・身近にあるものへの感謝の念に気づかせたい。

作文：「あの日、そして今」 田野畑村立田野畑中学校三年 一上山 萌一

出典：東日本大震災の記録「心をつなげて」

3月11日2時46分、あの時私達は清掃中でした。その日は、三送会があり、とても楽しく、そして卒業を目の前にした日でもありました。また、その日の5時間目には修学旅行に向けての話し合いをしていました。

そんな日におきた、かつて味わったことのない大地震。友人と身を寄せ合い、教室のドア付近で小さくなっていました。揺れが小さくなった時、避難指示が出され外に出ました。訓練の時と違い、みんなあせりや不安からか、かけ足で外に向かっていました。外に出たあとも、大きな余震が続き、体育館と外を行ったり来たりしました。そうしているうちに、次々と保護者の方が生徒を迎えに来ました。私も父がしばらく経ってから迎えに来ました。その時は、ホッとした感情と入りまざるようにむかえの遅い友人と離れる寂しさがありました。しばらく会えないような気がしたからです。そんな思いを抱いたまま家に着くと、電気がつかない薄暗く冷えた部屋に姉弟4人でいました。父は消防で家をあげ、母は仕事で久慈にいました。母は、急いで帰ろうと野田まで車を走らせたのですが、「波が来ている」と言われ、山を通り家に帰ってきました。母はすぐに水が出るか確かめた後、ストーブをつけ簡単な夕食を作りました。母がいとこと話しているうちにラーメンがのび、ラーメンとはいえなかったけど、そこでみんなが笑い暗い雰囲気が明るくなりました。夕食後は、1ヶ所で寝るために1階の和室にふとんを敷きました。電灯で私が部屋を照らし、母が5人分のふとんを敷き冷えないように大量の掛け布団をかけました。夜、車のナビで被害情報を見てみると、黒い波の中で流れる家や車が大量に映しだされていました。映像は悪かったけど、そこで見たものはすさまじく、鳥肌がたったのを憶えています。

その日から大変だったのは、生活以外より人間関係です。私の場合、家は高い所にあつたので直接的な被害はありませんでした。ですが、友人の中には直接被害を受けた子もいます。そういった、苦しみ（悲しみ）を背負ってしまった友人と、どのように接していいのか迷いました。そんな時、小学生の頃に行われた深谷中との交流でできた、友人が私あてに物資をおくってくれました。大きな段ボールの中には、タオルやお菓子、日用品など、さまざまなものが入っていました。そして、そえられていた手紙には、「ニュースで見て、力になりたいと思ったので送りました。足りないものがあれば、言って下さい。」と書いてあり、心が温かくなりました。私はこの物資を、自分よりも友人のために使いたいと思い、タオルなどを学校に寄付しました。

あれから、約1年が経った今。本格的に、復興が進み、被害を受けた人達も明るくなりました。全国から、寄せられてくる沢山の支援物資は、どれも心の温まるものばかりで感謝の一言しかありません。こうして、今を楽しく過ごせているのは、みんなのおかげだと思えます。

あの日、田老にいたいところ、宮古にいたいところ、久慈にいた母と姉、平井賀にいた親戚…。みんな無事であったことが、何より嬉しかったです。

2011年3月11日。あの日に起きたことは、これからも後世に伝えつづけていきたいです。